令和５年度　研究概要

所属名	研究会議名
情報・視聴覚センター	GIGA 端末活用研究会議

研究主題	自らの学びを調整する児童生徒の育成 ～振り返りの場面における GIGA 端末の活用を通して～
育成を目指す資質・能力	生涯にわたって能動的に学び続けるために自らの学びを調整する力
研究内容	令和３年１月の中央教育審議会答申「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す，個別最適な学びと，協働的な学びの実現を目指した学校教育～」では、ICT を活用して自ら学習を調整しながら学んでいくことができるよう指導することの重要性が指摘された。また、小学校、中学校、高等学校すべての学習指導要領においても「生涯にわたって能動的に学び続けることができるようにする」ことが示されており、自らの学びを調整する力が求められている。 本市の先行研究では、新田（2019）が、児童生徒の自己調整力を高めるためには、児童生徒自身が学習内容を見通し、学びを実感し、次の学びへとつながる振り返りを行うメタ認知の側面と、教師自身の授業改善の側面の２つの側面から授業づくりを行うことの有用性を示している。一方で、フィードバックによる見取りとそれによって変容する児童生徒の姿が即時的であったこと等が課題として挙げられた。 本市では「かわさき GIGA スクール構想」ステップ３として自らデータを活用し、学びを自己調整する「一人一人の子どもが主語の端末活用」を目標に掲げている。しかし、令和５年４月、市内 GIGA スクール構想推進教師（以下、GSL）を対象としたアンケートによると、「児童生徒は、GIGA 端末で作成した児童生徒のデータをその後の学習に生かしていますか」の問いに対して「生かしている」「よく生かしている」と回答した割合は28.4％と、自分の作成したデータをその後の学習活動に生かす場面が少ないことが示唆された。 GIGA スクール構想は、高速大容量の通信ネットワークとクラウド活用により、データを児童生徒同士、児童生徒と教師とが即時に共有できたり、集積したりすることを可能とした。そこで本研究会議では、自ら学びを調整するプロセスの中でも振り返りの部分において、GIGA 端末が児童生徒の学びに寄与できるのではないかと考えた。１時間の学習や単元を通して、短期的や中期的または長期的に、児童生徒自身が「何を学んだのか」「どのようにして学んだのか」、「次につながる気付き」などを GIGA 端末のデータに記録していき、それに対し、教師は GIGA 端末を活用し、個々の課題を把握し、一人一人の学びの変容を即時的、また、経時的変化を見取り支援を行っていくことが大切である。また、他者と情報を共有できる環境が児童生徒個々の振り返りの視点を広げたり言語表現を豊かにするきっかけになったりすると考えた。その積み重ねにより、児童生徒の「自らの学びを調整する力」の育成を図っていく。児童生徒の振り返る力を高めていくために、教師は、学習したことを振り返り、自らの学びや変容を自覚できる場面を教師がどのように設定するのか考えながら授業改善を行い、そして、児童生徒自身が学びを記録として残す有用性を認識できるようにしていきたい。